

令和5年度全建賞 推薦調書  
インフラ整備の事業又は施策の部(インフラの部)

ふりがな	しゅりじょうせい でん みせるふつこう ～いましかみられないふくげんげんばをしゅつちようじよいちがんとってぴーあーる～
1. 事業(施策)の名称	首里城正殿 見せる復興 ～今しか見られない復元現場を出張所一丸となってPR～
2. 事業(施策)実施期間	令和元年 12月 12日 ～ 令和5年 12月 28日
3. 事業費(工事費)	- 百万円
4. キーワード	首里城、見せる復興、職員の創意工夫、DX
5. 事業概要	火災により焼失した首里城正殿の復元過程そのものを観光資源として公開する「見せる復興」。その効果をより高めるため、出張所職員の創意工夫と行動力で、SNS による広報、首里城オリジナルのボランティアプログラムの開発など様々な取組を実施した。

6. アピールする事業又は施策の「手段」と「秀でた成果」		
ハード or ソフトの分類 :該当する方に○印	① ハード面 に秀でた事業	② ソフト面 に秀でた取組
アピールする 1)「手段」	( ) ( ) ( ) ( )	( b )地域の学校との連携 ( c )SNS の活用、職員手作りの広報 ( d )ボランティアイベントの開発 ( g )DX を活用した分かりやすい解説
アピールする 2)「秀でた成果」	( ) ( ) ( ) ( )	( a )きめ細かな広報やボランティアの活用による復元事業への理解の促進 ( f )「見せる復興」の取組による観光振興

7. 特にアピールしたい点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今しか見ることができない首里城正殿の復元事業をどうすれば分かりやすくPRできるかを職員一人一人が考え、自主的な発意により、SNS を使った動画配信、学生との連携による写真展、手作りの解説展示などデジタル・アナログ 様々な手段を駆使して広報を展開し、事業の効果的な発信に成果を上げている点。</li> <li>・出張所職員が、火災で焼け残った遺物(瓦、礎石)を新たな正殿の復元の材料として再利用するアイデアを発案するとともに、来園者にもその材料化の作業を手伝って頂く前例のない首里城オリジナルボランティアプログラムを所内で試行錯誤しながら開発し、遺物の有効活用と来園者の復興の力になりたいという想いの両立を実現した点。</li> </ul>
---------------	---

## 8. 事業を代表する写真及びキャプション



見せる復興に取り組む首里出張所職員



復元中の首里城の様子(令和5年11月1日撮影)

## 9. 事業内容・添付資料

### (1) SNS等を活用した若い世代への発信

【課題】 首里城復元に関心の薄い若い世代へどう復元事業を発信していくか、また興味を持って頂くか。

【取組】 ①SNSを活用した情報発信 ～YouTube動画「首里城正殿に会いたくて」～ [(21)-(c)、(22)-(a)]

若い世代への情報発信を強化するため、正殿復元の過程を動画としてYouTubeで公開することを職員が企画。公園を管理する(一財)沖縄美ら島財団の職員と連携し「首里城正殿に会いたくて」というシリーズ動画を令和4年6月から配信。職員も出演して工事関係者へのインタビューや復元事業の紹介などを行っており、より分かりやすい配信を目指してYouTuberの動画も研究しながら改良を重ね、令和5年12月までに29本の動画を公開。再生回数は累計1.6万回を超えており、事業の理解促進や来園のきっかけづくりに寄与している。



火災後の園内の紹介



棟梁へのインタビュー



平成と令和の正殿の違いの解説

【取組】 ②学生を巻き込んだ広報 ～沖縄の学生×首里城 写真でつむぐ復興への想い～ [(21)-(b),(c)、(22)-(a)]

地域との連携を深めるとともに、沖縄の将来を担う若い世代にも興味を持ってもらうため、学生の参画による広報として復元現場の今を学生目線で切り取る写真展「沖縄の学生×首里城 写真でつむぐ復興への想い」を企画。「写真甲子園」等で実績を有する県内の学校を選んで職員が直接訪問し、趣旨を説明して協力を依頼。賛同いただいた4校(沖縄県立美来工科高等学校、沖縄県立宜野湾高等学校、沖縄県立真和志高等学校、沖縄県立浦添工業高等学校)の写真部の学生に復元現場を撮影して頂き、その写真を園内で展示するとともに、ホームページでも公開した。

首里城になじみのない学生が復元事業や沖縄の歴史・文化に興味を持つきっかけとなったとともに、普段なかなかスポットライトが当たらない現場で働く無名の作業員にスポットを当てて撮影したことで、現場のモチベーションの向上にもつながった。



学生が撮影する様子



撮影した写真の例



園内での写真展(動画でも紹介)

### (参加した学生の声)

- 写真を撮影しながら、首里城の歴史と文化に触れる貴重な機会を感じました。
- 写真を通じて、この貴重な文化遺産を広く知らせる役割を果たすことができるという使命感も湧き上がりました。



## 9. 事業内容・添付資料

### (2) 職員手作りでできめ細かな事業紹介

#### 【課題】

正殿の復元のため、木材を保管・加工する木材倉庫や原寸場(原寸大の図面を作成する場所)等の仮施設を令和4年9月末に建設。原寸場内の作業の様子を見ることができる見学デッキも設けたが、作業が開始されるまで半年以上かかる見込みであり、当分は見せるものが何もない状態が続くこととなる。



正殿復元工事を行うための仮施設と見学デッキイメージ



見学デッキから見た原寸場内(完成時)

#### 【取組】 ①この場所(原寸場)で行われる作業イメージの等身大パネルの設置 [②1)-(c)、②2)-(a)]

作業が始まる前に来園される方にも有意義な情報提供をしたいと考えた職員の提案により、今後ここでどのような作業が行われるのかが分かるパネルの自主制作・展示を検討。職員自らがモデルとなり、作業の様子をイメージしたポーズで写真を撮影。いくつかの候補から職員間の投票によりふさわしい写真を選んだ後にパネル化し、展示を行った。

その結果、多くの来園者が足を止め、モニターに投影した過去の復元工事の映像とあわせてこれから始まる復元作業をイメージすることが可能となり、来園者の理解促進につながった。原寸場内での作業が開始された後も、出張所長のパネルは日々の作業内容を来園者に伝えるメッセージボードとして引き続き活用中。



採用ポーズを選ぶ所内の「総選挙」



等身大パネルの設置



作業内容の解説(メッセージボード)

#### 【取組】 ②手作り事業解説パネルの作成 [②1)-(c)、②2)-(a)]

復元に携わる職人の木材加工の伝統技術を伝えるため、解説パネルを手作り(ラミネート加工)で作成するとともに、その見本木材とあわせて展示。また、来園者から「いつ完成しますか? 今どこまで進んでいますか?」と聞かれることが多かったため、令和8年までの正殿の復元工程と今どこまで進んでいるかを分かりやすく伝えるパネルも作成。熱心に見ている方も多く、事業の理解促進につながっている。



伝統技術解説パネル

	2022年度 令和4年度	2023年度 令和5年度	2024年度 令和6年度	2025年度 令和7年度	2026年度 令和8年度
素屋根整備					
正殿用木材加工					
礎石等取付、礎石小屋組み工事					
正殿工事					
屋根工事					
彩色・塗装					
設備工事、内装工事					
西之廻下・南之廻下工事					

令和8年までの正殿の復元工程パネル



パネルを見学する来園者



## 9. 事業内容・添付資料

### (3) 焼け残った遺物をボランティアの力で再利用

【課題】 ・火災で焼け残った遺物を廃棄せず、再利用できないか。

・首里城の復元に少しでも力になりたいという来園者の想いを具体的な形にできないか。

【取組】 焼け残った遺物を新しい正殿の復元材料として蘇らせるボランティアの企画・実施 [(21)-(d)、(22)-(a),(f)]

火災を受けた破損瓦や石材を、新しく作る正殿の材料として再利用できないか、出張所内で検討。その結果、赤瓦の破片を砕き、シャモット(粉末)にすることで新たな正殿の赤瓦の原料に、礎石も細かくすりつぶすことで漆塗装の下地材にそれぞれ再利用できる目途が立ったが、その作業を機械的に行うのではなく、来園者にも手伝っていただくことを企画。前例がないため、どのような道具で、どう粉碎すれば安全かつ効率的か所内で何度も試行錯誤を行った上で、「首里城正殿赤瓦のシャモット製作ボランティア」、「うるし塗り原料”ニービの粉”製作ボランティア」として実施。

両ボランティア合わせて累計約4.2万人の方が参加し、参加された方からは「新たな正殿に自分も関わった材料が使われることは非常に嬉しい、誇らしい。完成したらまた来たい。」という声を多く頂いた。



また、「首里城に来園することが難しい特別支援学校の子供たちにも体験させてあげたい」という先生からの一通のメールに応え、職員が学校に訪問して器材の貸し出しや実施方法を調整。授業の中で石を砕く体験や、正殿の柱を加工する際にできたヒノキのカンナくずを触る体験などが実施され、生徒・親御様に喜ばれている。

#### (特別支援学校の先生からの御礼の声 抜粋)

ちょうど授業参観日になっていて、お母さん二人も入っていただき、楽しく取り組みました。お母さんの方が熱心に砕いていたりして…生徒も強い麻痺があるのですが、石に集中し、補佐をされつつほとんど自力で砕くことができました。固くて何度打っても砕けない石があったのですが、それが砕けた瞬間のうれしそうなおこと！満足できたようです。

ヒノキのカンナくずも大好評です。昨日はその時の授業を受けた生徒が必死に私を呼ぶのでどうしたのかと話を聞くと、週末、首里城公園に行ってきたひのきを見たとのこと。にこにこ満足そうでした。

### (4) DXで「見せる復興」をより分かりやすく

【課題】 正殿の復元の過程を、限られた時間で、より分かりやすく伝えることができないか。

【取組】 DXを活用した分かりやすい展示・説明 [(21)-(c),(g)、(22)-(a),(f)]

首里城公園では、年間145件(平均週2.8件:令和5年実績)と多くの行政視察に職員が対応しているが、限られた時間で事業内容をより分かりやすく伝えるためにDXを活用。正殿の設計BIM等をもとにデジタル空間上に復元後の正殿を構築し、タッチパネルや手持ちのファイル等での説明資料として活用。

建物下に隠れて見えない遺構や将来的な完成時の姿、断面図などデジタルならではの画像と現在の進捗状況を照らし合わせながら説明することで「視覚的に理解しやすい」という声を多く頂いている。岸田総理も2度視察(令和4年5月14日、令和5年8月26日)され、第212回臨時国会の所信表明演説においても「この夏、私は全国のいろいろな現場にお邪魔させていただきました。そこで見たものは、変化の流れを掴む、日本人の力でした。全焼した沖縄・首里城の再建現場では、「見せる復興」で復興プロセス自体を観光の「力」にしていました。」と発言されている。



デジタル空間上に再現した正殿の断面図



首里城を視察する岸田総理



目の前の木材の使用場所を断面図で解説